

白洲正子著「遊鬼 - わが師 わが友 - 」新潮文庫 新潮社 1998年7月1日刊を読む

1. 人間が作った「規則」より、自分が信じた思想というか、基本的な原理に忠実であったことは確かである。
2. こんな話をしたことがある。——名前は忘れてしまったが、ある禅宗の寺に、門外不出の文書があった。それをどうしても見たいという熱心な学徒がいて、住職はその文書を出して来て下さったが、寺の規則だから、中身を見せることはできない、とかたく断った。

ややあって、その住職が、自分は用事があるから、ちょっと失礼する、どうぞごゆっくり、といって出て行った。いうまでもなく、自分のいない間に見ておけ、という謎^{なぞ}だったのである。「それがほんとの禅というものだ」と、次郎はいった。別に禅を理解していたわけではないけれども、直感的に共感するものがあつたに違いない。

その一事をもつても、「ディシプリンの権化」とは言いがたい。説明するまでもなく、このお坊さまは、寺の掟^{おきて}は守らなかつたが、自分の信じた「原則」には忠実であつたのだ。人を利する、濟度する、という仏教の原則に。

まことにプリンシプル、プリンシプル、と毎日うるさいことであつた。まるでプリンシプルがディシプリンに化けたみたいで、……中曾根さんが誤解されたのも無理はない。それというのも現代の日本人に、プリンシプルが欠けているのが我慢ならなかつたのである。諸外国の不信を招いたのも、そのためだと彼は思っていたが、私にいわせれば、もともと日本人はプリンシプルなんか持合せてはいないので、それで万事円くおさまっていた。今のお坊さまだって、プリンシプルを考えた上で行動したわけではない、臨機応変にやつてのけたのだが、信ずるところが強かつたために、おのずからプリンシプルに合致しただけの話である。

東洋人と、西洋人は、そういう風に、逆の方向へ行く。逆の考えかたをする。その点、白洲は、まったくの西洋人であつた。見たところも西洋人に似ていたが、外国の血は一つも入つてはいない。おそらくそれは言葉の問題から来ているので、いつも英語でものを考えていたのであろう。そこに次郎の不幸があつた。一概に不幸とはいえないかも知れないが、不必要な摩擦をおこしたのはそのためである。

P251 ~ 253

3. 次郎にはもう一人、ケムブリッジ時代からの親友がいた。ロビンという名前で、ストラッフォード伯^{はくしゃく}爵の称号をもつていたが、映画に出てくるような英国貴族を想像して頂きたくはない。彼は次郎とは正反対の、地味な人柄で、目立つことを極力さけていた。ほんとうの意味でのスノビズム

を、次郎はこの人から学んだと思う。いや、すべての英国流の思想の源は、ロビンにあるとって過言ではない。

今ここに書くことができないのは残念だが、身ごなしといい、教養といい、古きよき時代の英国紳士の典型といえよう。そのロビンが、去年の春亡くなった。以来、次郎はがっかり気落ちして、何事をするにも根気を失ったようである。

次郎の趣味は、自動車と、大工と、ゴルフであった。ロビンと暮した大学時代には、——その頃は金持だったから、ベントレーのほかに、ビュガッティというレーシング・カーを持ち、自動車競争にしじゅう参加していた。そういうカー・キチのことを、英国では「オイリー・ボーイ」と呼んだが、彼は死ぬまでオイリー・ボーイであった。

八十歳に達してからもポルシェを乗り廻し、とても市井の「隠居」なんて高級なものにはなり切れなかった。鶴川にひっこんだのも、疎開のためとはいえ、実は英国式の教養の致すところで、彼らはそういう種類の人間を「カントリー・ジェントルマン」と呼ぶ。よく「田舎紳士」と訳されているが、そうではなく、地方に住んでいて、中央の政治に目を光らせている。遠くから眺めているために、渦中にある政治家には見えないことがよくわかる。そして、いざ鎌倉という時は、中央へ出て行って、彼らの姿勢を正す、——ロビンもそういう種類の貴族一人で、隠然たる力をたくわえていた。

私も多少はそういう人たちと付合ったが、毎朝新聞を見ながら必ず文句をいう。そういう文句のことをグラムブルといい、誰に聞かせるともなく、ユーモアを交えてブツブツというのが面白かった。次郎の毒舌もそこから出ているが、悲しいかな日本語では、英語のグラムプリングのように軽妙には行かない。カントリー・ジェントルマンという興味深い存在も、政治が貧困なわが国では、直ちに通用する筈もない。せめて「水戸黄門」のテレビでも眺めて、うっぷんを晴らすより他なかった。

4 . 止むなく大工仕事に熱中していたが、大工の技術は前述のミヨシさんに習ったので、上手であった。家を建てたり、直したりすることも好きだったが、先立つものがないので、父親のような贅沢はできなかった。せいぜい日曜大工程度で、ちょっとしたテーブルや戸棚などはすぐ作ってくれるので重宝した。素人で、腕があれば、どこまでも凝りそうなものなのに、材料なんかそこのベニヤ板で間に合せ、接着剤でくっつけて済ましてしまう。この点、次郎は徹底した現実主義者で、思い切りがよかったから、私が思うほど淋しくはなかったかも知れない。

P256 ~ 257

[コメント]

NHKTV で 9 月 21 日から 3 日夜連続で白洲次郎を特集。多くの日本人が今になって白洲の存在を知らされる。本書は白洲の伴侶白洲正子の手になるエッセイ。「カントリー・ジェントルマン」とは何かがよくわかる。

- 2009 年 9 月 22 日 林明夫記 -